

ナルガクルガ変異種～
空迅竜～

Acu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダンプカーに轢かれた私は、モンスターハンターに登場する迅竜ナルガクルガに転生した。しかし原種でも亜種でも希少種でもない私は親ナルガに捨てられ、いきなり人生（竜生?）ハードモードに……。弱者は淘汰され、強者だけが生き残り、常に死と隣り合わせ。そんな世界で元女子大生は生き抜いていく。 ※注意!これは主人公最強モノでも、ハーレム系の話でもありません。あくまでも心は普通の女の子が主人公ですから、嫌悪を感じる方はブラウザバックをお願いします。

目次

A c t. 1	迅竜ナルガクルガ	—	1
A c t. 2	出稼ぎメラルーの受難		
6			
A c t. 3	「ご飯つて美味しくて、感謝 するものなのニャ！」	—	11
A c t. 4	いざ、メラルー村へ		
17			
A c t. 5	メラルー村にて	—	23

A c t . 1 迅竜ナルガクルガ

「うええええ……やつぱ不味いなあ……」

ぷち、ぷちゅ、と口の中の虫を噛み潰す。静電気のようにばちばちとしていて舌が痺れるし味も酷いものだが、ないよりはマシだ。

次の虫を捕まえながら、私はこんな劣悪な生活に至った経緯を思い出していた。

私は、数週間前までどこにでもいるような女子大生として生きていた。生物学者になるという夢だつて持っていた。

でも、それは数週間前までの話。

いつものように大学に行こうとしてダンプカーに轢かれたと思ったら、何か硬いもの（後にあれは卵の殻だと判明した）を突き破り化け物の目の前に転がり出たのだ。何か黒くて猫に嘴がついたみたいな顔のドアップが目と鼻の先にある。

当然、私はびびびつた。びびりすぎて声も出せず固まっていたのだが……。

「な、何この子!? あたしと色が違うじゃない!」

突然ギャウウウウ!!と目の前の化け物が吠えた。

食われる！そう思った私に、意味のある言葉としての副音声が頭に響く。は？日本語？

「こんなのあたしの子供じゃない！」

意味分かんない……とか何とか色々つぶつぶつ呟いたかと思つたら、混乱しきつて硬直したままの私の首根っこを乱暴にくわえられて、これまた乱暴に放り投げられた。

あ。

この化け物、モンハンのナルガクルガだ。

そこで私の記憶は途絶えている。

「……はあ、つまるところ私もナルガクルガなんだよねえ……」

そう。人間であつた私は、現在ナルガクルガとして生きている。

母親（とは思いたくないが）のナルガクルガは原種の黒色で、色が違うという言葉からは私つて亜種なのかなあなんてことも考えたけど、それも違う。

緑色の亜種でもなく、白いんだか藍色なんだか微妙な希少種でもない。

「空色ナルガつて誰得……少なくとも私得じゃない」

捨てられたあの日から文字通り泥水を啜り、そこらへんの草やキノコを頬張り、虫さえも食べて生きてきた。意外とお腹を壊すこともなく、何とか生き永らえている。

今の私の住処はケルビやガーグアが長閑に餌を食み、ジャギイやアオアシラがそれらを食べらい、浅い川や人間の村の名残も残っている場所の木のう上。この世界が本当にあのモンハンの世界なら、たぶんここは3rdの溪流じゃないかと思われ。まあ、3rdしかやつたことがないから予想でしかないんだけど。

でも、だとしたら他の肉食モンスターに見つからなかったのは本当に幸運だった。

私は子供だとはいえ、一応ナルガクルガでケルビ並みの大きさはすでにある。ずっと前に野草と虫だけのご飯に嫌気がさして、ガーグアを襲うために木のう上からゲームで見ていた飛び掛り攻撃の構えをとった瞬間、ドスジャギイが群れを率いて現れたときは心臓が止まるかと思ったものだ。

「お腹空いたなあ……あ、ガーグア……」

私のいる木より少し遠くでガーグアが餌である虫をついばんでいる。虫だけで足りるなんてうらやましい。

私の体色は空色のため、本当のナルガクルガのように周囲の環境に溶け込むことはかなり難しい……つまり狩りをするのも難しい。今は私も小さいから何とか食いつないでいるが、それもいつまでもつか……。野草と虫だけではすでに足りなくなってきた。そろそろケルビやガーグアを狩ることが必要になるのに、私にはその力がないのだ。

別の捕食者に見つかる危険性と生命維持に必要な食事の確保……どうしよう。まだ死にたくない。死にたくないのに、死の危険性が消えない。死と隣り合わせ。これが、この世界の理なのだと分かっている。分かっているが、死にたくない。

まだ飛べないから、移動手段は地上と木の上のみ。もし獲物を狩れたとしても、この体格では持ち運べない。

「……その場で食べる、のは血の匂いで他のが来るな」
考えなきや。

ここはゲームじゃない。現実だ。食べなきや死ぬ。体はナルガクルガでも中身は人間だったんだから、頭を使うんだ。

「ジャギイに交渉を持ちかける？ リスクが高すぎる、そもそも言葉が通じるかも分からない。魚を取る？ この体じゃ泳げないし、魚がいるのはジャギイの縄張りだ……どうしよう、一度には運べな……一度には？」

じつ、とガーグアを見る。

丸々と太っていて食べるところはたくさんありそうだ。でも一度に運べて、即効でエネルギーになるのは？ なるべく骨が少なそうで、今の私が簡単に噛み千切れる部分は……お腹だろうか。

「……た、食べたくない……」

生々しい想像をして、やっと気づいた。私は、あのガーグアを殺して食べるのか。あの柔らかそうな細い首に噛みついて、呼吸が途絶えたのを確認して、そうして。腹を裂いて、食べるのか。

「……………たべなきや、しぬんだ……………」

その日、私は泣きながら血の滴る生肉や生暖かい内臓を食べた。

美味しくなんて、なかった。

美味しいだなんて感じてない、絶対に。

Act. 2 出稼ぎメラルーの受難

さつき狩ったばかりのケルビのお腹にかぶりつく。むせ返るような血の匂いに惹かれて、群れの下つ端のジャギイが数匹寄ってくるが、一声吠えるだけで逃げていくようになった。

・・・私が初めてガーグアを殺して食べた日から、すでに一ヶ月が経とうとしている。体格としてはドスジャギイと同格となり、アオアシラとはお互いに干渉しない日々を送っていた。

「虫歯になりそうだからハチミツなんかいらんだけどなあ」

ファーストコンタクトで「ハチミツはあげないよ!」と威嚇されたのは記憶に新しい。すっかり溪流の暮らしに慣れた私だけど、人間（いや、まあ竜だけど心は人間だからね）ひとつ欲が満たされるとまた次がほしくなるもので。

「はあ……話し相手がほしい……」

もう少し大きくなって力も強くなったら、おしやべりくらいはできるだろうか。メラルーやアイルーには悲鳴をあげられて心が折れた。可愛いし、あわよくばもふもふしたかった……。

毎日を生きるだけで必死だった頃は、大して気にもしてなかったけど、やつぱり一人ぼつちは寂しい。太陽が昇る前に起きて、ガーグアやケルビを一日に一匹だけ狩って食べ、足りない分はキノコや草、虫でどうにか凌いで日暮れと共に眠りにつく。これじゃ、本当にただの獣だ。

最近、いつも考える。体は竜でも心は人間の私は、どう生きるべきなのだろう。獣として生きていくのは楽だ。でもそれは私の人間の部分が悲鳴をあげる。人間として生きるのには私の体が許さない。

ケルビを食べ終わり、最近の寝床に帰った。メラルーたちの住処に近い、大木の高いところにある大きな洞は木を登らなくちゃいけないけど、なかなか住み心地がいい。

ごろりと体を横たえて赤く汚れた刃翼を綺麗にしながら、また悩む。

いまだにガーグアとかを殺して食べるのには嫌悪感と罪悪感がある。だから一日に一匹だけと決めて食べているけど、これからもっと食べなきゃいけないくなる・・・私は、悩んでいた。

「私、生きてていいの」「ニャーニャーニャー!!!」「うおっ!?!」

……び、びびったあ……尻尾ぶわってなってるよ……。

えーと、今のは真下からだ。ひよこりと顔を出して覗き見してみる。

「いやニャー!!」ボクなんか食べても美味しくないのニャー!!」

「うるせい！ オレたちやメシがとれねいんじやオヤビンに怒られるんだよお！」

「だからオマイがメシになるか、メシをオレたちによこすか選びなあ！」

私の住処の太木を背に一匹のメラルーがジャギイたちに追い詰められていた。……

メラルー追いかけるより、ケルビ追いかけるほうが効率いいと思うんだけどなあ？

「ギニャーアアア!!」 だあかあらあ！ ボクは食べるころないし！ あんたらもケル

ビ追っかけたほうがいいのニャー！」

「な、何だつてい!?!」

あ、やっぱりそう思うよね。

ああああもう！ヤバイのニャ、ごつつやバイのニャー！

せつかく故郷の砂原から溪流のメラルー村へ出稼ぎにきてたのに……センパイたち

とはぐれちやうなんてー！

こつちのジャギイ怖すぎニャー！

「……ケルビとメラルー……どつちがオトクってオヤビン言つてたつけい？」

「ばっか、オマイ……そりやあ目の前にいるのといないのとじゃ、いるほうがオトク？」

決まってるだろうお！ ……たぶん」

「……あんたら……バカすぎるのニヤ」

「ぬあんだつてい!!」

「ギニヤー！ おかあさん、おとおさーん!! 先立つ不幸をお許しくださいああい!!」

まだ可愛いおヨメさんももらってないのに、ボク死んじやうのニヤ……。

「グルルルルル……ここで何してんの……?」

「!? こっこの声はっ」

「あいつじやないか!? あの空色の!」

「まじでか！ だったらさっさとトンズラしまおうぜい!」

えっえっ、な、何なのニヤ？急にジャギイたちが逃げちやつたのニヤ……。

「……大丈夫?」

「あつ、さっきの声の……た、助けてくれたのニヤ？ 誰なのニヤ?」

「あー……ま、まあそんなことはいいいから「よくないのニヤ! 恩は100倍にして返

せて家訓なのニヤー!」……びっくりしない? 逃げない?」

「びびらないし、逃げないニヤー!」

むんつと胸を張って答えると、謎の声さんは黙り込んでしまったのニヤ。

うーん、でも本当にどこにいるのかニヤ？ジャギイたちが逃げたんだから、強いんだ

ろうけど……人間かニヤア？アオアシラは……ないない、いつもボクたちとハチミツの取り合いしてて仲悪いからありえないニヤ。

誰なのかニヤー、お礼は何かいいのかニヤーと考えていると、ふっとボクの周りが暗くなった。

「ニヤアアア!?! ふ、吹っ飛んじやうのニヤー!」

背中側にあつた大きな木にしがみついて風圧に耐えながら、降ってきた大きな空色を観察する。

その大きさのわりにたすつなんていう軽い音で着地し……着地したってコレ、生き物だったのニヤ!?!……そおつと右を見ると長いムチのような尻尾。ボクたちと似ている後ろ足。ま、まさかニヤ……。

空色はゆつくりと振り向く。鋭い刃物みたいな翼、次に鋭くて青い爪が見え始め、最後に。

ボクたちが嘴をつけたみたいな顔が。

「……………じ、迅竜ナルガクルガニヤー……………!!!」

「えっ、それじゃあお母さんに捨てられちゃったのニヤア……？　今までよく生きていられたニヤア……すっごくがんばったのニヤ、えらいえらいなのニヤ！」

「あ、ありがとう……でも、何か子供扱いしてない？」

「そりやそうなのニヤ。　だつてあんたの話からすると、あんたつてまだ1歳にもなつてないニヤ？　だつたらボク2歳だし、ボクのほうが年上なのニヤ！　つまりお兄ちゃんなのニヤ！」

ボクの言葉にショックを受けるナルガクルガ。

自分よりちっちゃいからつて甘く見るなつてことニヤ……ボクとしてはこんなに大きいのが年下だなんて信じたくないのニヤ……でも、ボクだつてもっとおつきくなれるハズ……。

「……にしても、何であんまり血の匂いがしないのニヤ？　ナルガクルガつて肉食なんじゃないのニヤ？」

「……私もガーグアとか食べるけど……」

うん？　どういふことニヤ？

ボクより何倍も大きいナルガクルガは、何だか言いづらそうにモゴモゴと口籠り、それに加えて耳がしよんぼり垂れてしまっている。

「普段はキノコとか虫とか食べて……ガーグアとかは1日1匹だけつて決めてて

……」

「ニヤニヤ？ 何でそんなこと決めてるのニヤ？ きちんと食べないとおつきくなれないのニヤ」

「だ、だって……私が食べるのってことはつまり……殺すってことなんだよ？」

「……………ニヤ？ 意味分かんないニヤ」

「え…………？ ええと、こ、殺すっていうのはき…………」

いやいや、言葉の意味くらい分かるのニヤ。ボクが言いたいのは、

「いやいやいや、何アタリマエのことを言ってるのニヤ」

ほかーんと間抜けに口を開けたまま、ナルガクルガは固まってしまった。

でもボクは空気の読めるKYメラルーなので、ここはグツつとガマンする。

「…………ニヤブフォツ！」

「……………」

「ニヤツフフ…………あつ……………」

……………そ、そんな冷たい目をしないでほしいのニヤ…………。

「…………ゴ、ゴホンツ！ マジメな話、ボクたちはベジタリアンなわけじゃないんだから、殺さずに食べるなんて無理に決まってるのニヤ」

「で、でも…………」

「それとも何かニヤ？ 命には価値があつて、虫とガーグアじゃ命の価値が違うつていうのかニヤ？」

少しギモンに思つたことを尋ねると「え」と、か細い声を漏らした。

ボクにはよく分からないニヤ。どうして虫を殺して食べるのはいいのに、ガーグアを殺して食べるのはダメなのか。ボクたちメラルーだつて魚や肉を食べるし、大きい獲物を狙えないワケアリの竜に襲われたりすることもある。

「そつ、そんなことは……つ命の価値なんか皆同じだつてことは分かつてる！ でも、でもっ！ 言葉が通じるんだよっ!? それでも殺せるの!!？」

「……………はあ……………だつたら野垂れ死ねばいいニヤ」

「……………は？」

ほんとに変なナルガクルガだニヤー……。

「確かに食べるわけでもなく、何かを守るためでもなく殺すのは最悪だニヤ。そもそも、殺された側からしてみれば罪悪感なんか持たれたつて迷惑ニヤ。だつて謝つてもらつたつて死んだヤツは生き返らないし、謝るくらいなら最初つから殺すなつて話なのニヤ。それに、生きるためにお互い必死で逃げたり襲つたりするのはアタリマエで、みいんな納得してることだニヤ」

「……それとも、キミは生きたくないのニヤ？　ここまで言っても分からないなら、この先生きていけないニヤ。　　というか……他の竜とかに食べられちゃうより、今のうちに死んどいたほうが楽だと思ふニヤ」

野垂れ死に。

それはこの、私よりはるかに小さいメラルーから飛び出た言葉。

そして、私の根底を揺るがす言葉でもあった。

私は、死にたくない。人間ではなくなつてしまつたけど、生きていたい。

だからこそ嫌だつた食生き物を殺すこと事をしてまで生き永らえてきたのだ。それに、どうして忘れて

いたのだらう。確かに私は日本人で女の子ではあつた。でも、それはもう過去の話で

……今は迅竜ナルガクルガで。

「……うん、私、自分の好みで命の価値を決めてたのかもしれない。虫もガーグアも生

き物だしね。　　この世界が、生きるために必死で足掻かなくちゃいけない世界だつてこ

と……生きたいなら余計なことを考えちゃいけないってこと、何で忘れてたのかな

……」

「……別に、その思いが悪いとは言わないニヤ。　　というかどうせなら、感謝してほしい

のニャー！ ちゃあんと感謝して美味しく食べるのニャー！」

感謝……感謝かあ…… 「ありがとう」 なんてもう、ずっとずっと言っていないなあ。

思わず苦笑が零れる。

「メラルーくん」

「ニャ？」

「ありがとう」

「……ちゃあんと美味しく食べて、これからも生きてくニャ？」

「うん……ガーグアってジューシーで美味しいよね」

「どういたしましてなのニャー！ ガーグアはジューシーだし、ケルビはさっぱりしてて

ヨダレが出ちゃうニャア……ほーんと、溪流最高ニャー！」

Act. 4 いざ、メラルー村へ

小鳥が歌い、獣たちが動き出す爽やかな朝。美味しそうに草を食む、ケルビの番つがいをひたと見据える。

「……………ぐるぐる……………」

野生の性なのか自然と鳴ってしまう喉を不思議に思うが、まずはご飯だ。

どうやら木の上にいる私にはまだ気づいていないようで、のんびりと仲睦まじく過ごしているケルビたち。彼らの命をもらうのは未だに罪悪感を感じるが、私は約20年もの間「生き物を殺すのは罪」と教わって生きてきたのだ。もうこの考えは私の一部と化してはどうしようもないが、食べなければ私が死んでしまうから。だから。

生きるために、私は彼らを殺そう。

私は雌のケルビに狙いを定め、飛び出した。

「!? アナタ逃げ、イヤアアアアッ!!」

「な……………つうわああああ!!」

いつも手入れを欠かさない刃翼で雌の体を引き裂く。雄はケルビステップで逃げようとしていた。ゲームの時はなかなか素早いと思ったものだったが、今ではもう遅すぎ

るくらいで。

雌が力無く横たわっているのを確認し、もう一度足に力を込めて跳ぶ。うまい具合に雄の目の前に着地した私は、一切の容赦をせず自慢の尻尾を叩きつけた。ダアン！と大きな音をたてて尻尾は雄に直撃。尾棘に突き刺さった雄を軽く尻尾を振ることで地面に落とし、少し背伸びしてキョロキョロと周囲に危険がないか確認する。

「……ふう、大丈夫だよ。おい、メラルーくん、終わったよー」

「おお、見事なモンだニヤア……あんた、ほんとにまだ子供なのかニヤ？　ボクすつごくギモンなのニヤー」

「まあ、私って物陰に隠れるの得意じゃないからねえ……自然と速く動けるようになってんだ」

「ふうん……あの速さはそれだけじゃない気がするかもしれないんだけどニヤア？」

まだぶつぶつとぼやいているメラルーくんを無視して私はケルビの雄を食べ始めた。もちろん「ありがとう、いただきます」と呟いてから。

「うーん、肉以外にも食べてたからかニヤア……？　ううん……って、ああああもう食べてるのニヤー!?　ボクのぶんも残してニヤー！」

「あーうん、ちゃんと残してるってばー。とうか、メラルー村へのお土産にするんでしょ？　せつかく柔らかい雌のほう残してるんだから手え出さないですよ？」

「ううー……分かつてるのニヤ。 センパイたちにご心配おかけしましたって言わなきゃニヤア……家族みたいなヒトたちだから、きつと心配してくれてるのニヤ……」

……うむ、今日もケルビがうまい。本当は最初から美味しかったけど、昨日までの私はそのを認めたくなかった。血と肉の味が美味しく感じることを認めてしまつたら、本当にただの獣になってしまふ気がしていたから。

ただ殺すのではなく、生きるために命をいただく。そういう考え方の違いだけでこんなにも気持ち軽くなるのだから、なかなか私も単純なものだ。

「……天気いいなあ……あ、あの雲、魚に似てる………ん、食べ終わった？」

「超ウマーだったニヤー！ ……よし、骨とか使える部分も持ったし、背中にケルビ乗つけるからちよつとしやがむのニヤー！」

「はいはい……うえ、紐かこれ？ ちよつときつい」

「ボクたちはヘビツタって呼んでる草ニヤ。 きつくても落とさないためなんだからガマンガマン！ さあ、出発シンコーなのニヤー！」

「うえーい、つてメラルーくんも乗ってくのかよ！ きみ元気なんだから歩け！」

「なーにを言ってるニヤー……ボクとあんたとじゃ歩く速さが違いすぎるのニヤ。 ほれ、ちやつちやと歩くニヤー！」

「……何か腑に落ちない……」

頭にメラルーを乗せてのしのし歩く私の姿は、さぞかしシユールだったんじゃないだろうか……ああ、私の尻尾よ棘を出しちや駄目だよ……。

「ただいま戻りましたニャー!!　メルル、生きてましたのニャー!!」

「……めつメルル!?　オマエ、生きてたのつてニギヤアアアアアア!!」

「チビツコ帰ってきたのかつてニャゴオオオオオオオ!!　ナルガクルガニャアアアアアア!!」

「ア!!!」

「……こうなるんじゃないかと思ったよ……」

もう太陽も真上に昇りきった頃、私たちはメラルー村に到着した。ゲームでは私が入れそうな入り口などはなかった気がして不安だったのだが、ガーグア荷車などを出し入れする入り口が密かに作られており、私たちはそこからお邪魔させてもらったのだ。た。

「……というか、きみつて名前あったんだ?」

「メスみたいな名前だからあんまり教えたくなかったのニャ……みんなー!!　このナルガクルガはダイジョブなのニャー!!」

メラルーくん改めメルルくんの一声によって、上から下への大騒ぎは一先ずの終わりを迎えた。とはいえ、物陰からこそそと疑わしげに観察する視線やひそひそと相談しあう囁き声が聞こえてくる。正直いってナルガクルガの良すぎるくらいにの耳はその囁き声を鋭敏に聞き取っているため、何だか気まずい。

「……メルルっ！ 無事でよかったのニヤッ!! 心配したぞバカヤローツ!!」

何ともいえない雰囲気の中、1匹の赤いバンダナを首に巻いたメラルーが飛び出してきた。

「あつ、センパイ!! うわああああん、はぐれちゃってゴメンナサイなのニヤアアアアツ!!」

「バカ! ほんとにバカなのニヤー!! でも、良かった、生きてた、おまえ無事だったんだニヤ……」

メルルくとセンパイメラルーはがっちり抱き合い、2匹ともわんわんと泣き出している。それにつられて他のメラルーたちもほろほろと涙を流していた。

メルルくんは朝、「家族みたいなヒトたち」と言っていたけど……。

「……ほーんと、兄弟みたい。家族っていいなあ……」

白髪が増え始めてきていたお父さんと、シワが増えたと嘆いていたお母さんに、彼女ができたときと笑っていた弟。

何だか、無性に家族に会いたくなつた。

Act. 5 メラルー村にて

「メルル、無事だったのだにや……これ、おまえたち、そろそろ落ち着きにやさい。お客が困つとるじゃろ」

「あつ、長老サマ！ ただいま帰りましたニヤ！」

自分の家族を思い出してしんみりしていたところに、また別の声がかかる。どうやらこのメルルーたちの長老であるらしく、少ししわがれたその声は妙に耳に馴染むものだった。

「ほつほつほつ、元気そうでにやによりにや。……さて、お待たせいたしましたにや、

迅竜殿」

「………あ、はい……あついや、大丈夫です、全然待つてません」

何とも穏やかにや童ですにやあ、と笑う長老はガーグアの頭を模した杖をつきながら私に近づく。そして恐ろしいだろう私の顔をぺたぺたと触つては時折感心したように「ほう」とため息をこぼすものだから、だんだん気恥ずかしくなってくる。

「………ふむ、空色の迅竜とは………わしも初めて見ましたにや。その鋭い目つき、これからもつと強くにやられるのでしようにやあ」

「長老サマ、空色のナルガクルガってそんなに珍しいんですかニヤ？」

「おお、メルルは砂原出身じゃから本物は初めてじゃったにやあ……そうじゃの、原種は黒で亜種は緑色じゃ」

「へえ、あんたってそんなに珍しいヤツだったんだニヤア？ ……中身は変だけど」

「聞こえてるよ、失敬な。 ……まあ、私はたぶん突然変異だと思うし、私以外には空色のナルガクルガなんていないんじゃないかなあ」

突然変異という言葉の意味が分からなかったのだろうか。長老とメルルくんたちだけでなく、それまで黙って聞いていたセンパイさんや遠巻きに見ていたメルルーたちまで揃って首を傾げている。か、かわいい……。

私が内心で悶えていると、そこに恐る恐る近寄ってくる一匹のメルルー。首に黄色のバンダナを巻いているその子は、かなりビクビクしながら私の目の前で足を止めた。

「あ、あのう……迅竜さま」

「あれ、コウハイ？ どうしたのニヤ」

「お帰りのニヤ、メルル……いや、さつき迅竜さまが言ってたことなんだけどニヤ……」

どうしたんだろう、もしかして突然変異について訊きにきたんだろうか。

「えーと、コウハイさん？ 何か訊きたいことでもあるんですか？」

「ひいつ！ ……あああああのつ、ぼくつ……あなた以外に空色の迅竜さまを見たことあるんですニヤツ！」

「……………え」

……私は、空色であるが故に捨てられた。その空色が、私の家族なかもが他にもいるの？

そのナルガクルガも捨てられたんだろうか、私みたいに孤独に育つたんだろうか。それとも、親に受け入れられて育てられたんだろうか。いずれにしても、そのナルガクルガに会ってみたい。

「えーと……トツゼンヘンイが他にもいるってことニヤ？ とうか、どこで見たのニヤ？」

「トツゼンヘンイっていうのはよく分からないんですけど……霊峰と溪流の間の、ギリ溪流って言える辺りで見たんですニヤ」

「ふむ、しばらく前に黒い迅竜が住み着いた辺りじゃや……迅竜殿、にやにか心当たりはありませんかの？」

「……………」

原種のナルガクルガ。黒いナルガクルガ。

喜んだのも束の間だった。心臓が、嫌な音をたてて鼓動を刻んでいる。思い出されるのは2ヶ月ほど前のこと……何が何だか分からないうちに捨てられ、そして泥水を啜つ

てまで生き延びた怒涛の2ヶ月間。元人間としての知恵とゲーム知識がなければ死んでいただろう2ヶ月間。

その、ほとんどの元凶。

「……たぶん、私の母親じゃないかと」

「ニヤニヤツ!!? それってあんたを捨てたっていう……?」

「にやんじやと!!? 我が子を捨てるにやんて信じられん……しかし、確かにそれにやら辻褄は合いますにや。おそろくじやが、その迅竜がまた空色の子を産んだのかもしれないにや」

そんな……あの母親のことだ、とつくにその子を捨ててしまったに決まっている。私のように何かしらの知識がなければ、もう死んでいるかもしれない。

地面が揺れた気がした。いや、正確には私がふらついたのだろう。メルルくんや長老たちが酷く驚いた顔をしている。

「だ、ダイジヨブニヤ!!? まあ、あんたの親がまた捨ててるかもだし無理もないニヤ……コウハイ、その竜はどんな様子だったか覚えてるのニヤ?」

「ニヤツ!!? えっええと……なんか、周りにいたちつちやい迅竜さま2匹にいじめられてたんですニヤ。あの時は親迅竜さまはいなかったみたいでしたけど……傷だらけでかわいそうでしたのニヤ……」

見捨ててしまったんですニヤ……と俯いているコウハイさんを尻目に、私はホツと息を吐いた。良かった、まだ生きているかもしれない。今からでも間に合うだろうか、生きていけるなら助けたい。私の、家族なかまになつてくれるかもしれないのだから。

私はコウハイさんにお礼を言い、長老に件の場所への行き方を尋ねた。少しコウハイさんに対して適当になつてしまつたかもしれないけど、それは許してほしい。

「ううむ……教えるのはいいのですがにやあ……」

「……？　何かあるんですか？」

「うむ、迅竜殿……あにやたさまは空色で、それほど小さいわけでもない……おそらく隠密に行動するのは無理でしょうにや。それにいくら御母堂とはいえ、縄張りに侵入したのを許すとは思えませにやんだ……下手したら死ぬやもしれませんにや」

「つでも……!」

「分かつとりますにや、心配にや気持ちは……。迅竜殿、あにやたさまは飛べますか
にや？　戦わずにすぐ逃げられるにやら大丈夫だと思えますにや」

……飛べない。私はまだ飛ぶ練習すらしておらず、私より格上の竜に出会つたら確実に死んでしまうだろう。長老の懸念ももつともだった。

「………飛べないのニヤ？」

「メルルくん……うん、飛べないんだ……」

「呼び捨てでいいニヤ。 あんた、よくそれで助けようなんて思ったのニヤア……」

「ううっ……メルル、どうしよう」

「はあ？ どうもこうもないニヤ！ 今日は遅いから帰って寝るにしても、明日から飛

ぶ練習するに決まってるのニヤ!!」

「……………はい、そーですネ……」

メルルの正論に返す言葉もなく、挨拶もそこそこに私はメラルー村を後にした。外に出てみればメルルの言っていた通り薄暗く、ゆっくりと沈む太陽と共に私の気持ちも暗い水底に沈んでいくようで。

巢に帰ってからも泣きたいような、怒りだしたいようなはつきりとしなない気持ちのまま、結局一睡もできずに夜は更けていったのだった。